

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13920

研究課題名（和文）多文化化・多民族化する日本食をめぐる比較社会学的研究

研究課題名（英文）Comparative sociology of multicultural and multiethnic Japanese food

研究代表者

安井 大輔（Yasui, Daisuke）

立命館大学・食マネジメント学部・准教授

研究者番号：90722348

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：既存のグローバル文化理論は、元の文脈から切り離される文化の脱埋め込みに注目し、越境文化の現地化、ハイブリッド化を報告している。いっぽうで現代の文化は伝統・真正性の名の下にナショナル・ローカルな価値づけが重視されている。これらは単なる普遍化でもその反動でもない、より錯綜した文化現象である。この複雑な脱/再埋め込み過程を、海外の日本食・和食の調査から分析した。現地飲食店の参与観察、経営者や客へのインタビュー、ドキュメント・ビジュアル資料から日本食の多民族化の過程を詳細に記述分析し、多文化に開放されつつルーツとつながる文化の恒常性を成立させる条件を考察し、グローバル文化の社会理論の更新をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多文化化する社会でどのように多民族に開かれた日本食が具体化されるかを明らかにする本研究は、“We are What We Eat.”という理念を実証的に問うことで、「日本人の、日本人による、日本人のための」食として語られてしまう文化ナショナリズムを相対化する社会的意義がある。日本食の概念が特定のイメージ、ステレオタイプと結びついており、「日本食」の実践がそれを強化/変容している食文化の中に、エスニシティ・レイシズムの課題があることが分かる。このように食をめぐる日常の諸実践の中から、グローバル文化をめぐる問題系についての議論基盤を提供する点で、本研究には人文社会科学を発展させる学術的意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：Existing sociological/anthropological theories of global culture focus on the de-embedding of cultures that are detached from their original context and report the localization and hybridization of cross-border cultures. Contemporary culture, on the other hand, emphasizes national and local valorization in the name of tradition and authenticity. These are neither mere universalization nor its reaction, but more complex cultural phenomena. This complex de/re-embedding process will be analyzed through a cross-sectional survey of Japanese restaurants abroad. I conducted a detailed descriptive analysis of the process of multiethnicization of Japanese food based on participant observation of local restaurants, interviews with managers and customers, and document/visual analysis, and examined the conditions for establishing a cultural constancy that is open to multiple cultures and connected to the roots, thereby updating social theories of global culture.

研究分野：社会学

キーワード：食文化 和食 グローバリゼーション ナショナリズム エスニシティ アイデンティティ 文化理論  
文化人類学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでグローバル化によって生じる人・モノ・金の国際的な移動から生じる社会的コンフリクトや文化接触について、生活者としての移民に注目し彼らの食文化の変容、創造、維持を切り口として分析する比較社会学の調査研究に従事してきた。特に、日本、ラテンアメリカやヨーロッパにおける移民の集住する地域社会でフィールド調査や計量調査をおこない、エスニシティ(民族)や社会階層の分野で、異なる文化を持つ人々の食とアイデンティティの関係について分析を重ね、その調査方法を洗練させてきた。

グローバル化をめぐる社会理論は、コスモポリタニズムを前提とする(U.ベック(2006)、K.A. アップピア(2007=2022)など)、異なる文化との出会いが互いを変容させ、コスモポリタンなアイデンティティを生み出しつつ多様性への寛容性を醸成するという想定は、グローバル化論の中心的価値規範だった。この志向は、社会学者 A.ギデンズのモダニティ論が唱える脱埋め込みメカニズムとも親和的である。消費文化のグローバル化により巨大産業が成立するとともに、世界中に拡大された文化は元の文脈から切り離され現地化し、またときに本国へと逆輸入されることによって、自国の文化へと再帰的な問いかけを生じさせてもいる。ギデンズはこのプロセスを「相互審問」と呼び互いの文化的伝統に対して「言い返し」を行うことで、それぞれの文脈が変容すると指摘する(Giddens 1990=1993)。このハイブリッド化には、文化多元性を望ましいものとして受容する地球市民的な主体が前提されている。

いっぽうで、現代世界における文化輸出においては、UNESCO の文化遺産登録に見られるように、伝統性・正統性の名の下にローカル・ナショナルな真正性が志向されるようになっていく(安井 2018b)。これは政府機関による宣伝だけでなく、文化の担い手である現地の一般大衆や観光客たちの希求でもある。各国にみられる地域主義・愛国主義・共同体主義の高まりは、一元的なグローバル化に対抗する文化ナショナリズムの一種とみなすことができるだろう。ただしそこで求められる真正性は復古的なものとはかぎらず、ルーツ社会ではまがい物と感じられる文化が受け入れ社会では高級文化と評価される場合や、その逆も生じるような複雑な状況になっている。

しかしこうした現象について、現代のグローバル化をめぐる社会理論は十分に説明することができていない。たしかにグローバル化の前提にもなっているモダニティ論は、文化を普遍化・標準化する脱埋め込みの進むいっぽうで再埋め込みが求められると言及しているものの、それがいかなる状況の下で希求され、どのような主体によってどのようなかたちで実施されていくのか、という再埋め込みの具体的な様相やその発動する条件については提唱者であるギデンズ自身も示していないのである。

以上の動向に照らすと、グローバル文化の脱/再埋め込みはより錯綜した現象であり、「現地文化への適合や融合による多様な文化の創出過程」という現行のパースペクティブも、ナショナリズムの高まりをグローバル化への単なる反動とみなす視点もともに一面的で不十分であり、開放性と恒常性の交錯する文化の複雑なメカニズムはより詳細に検討され、新たな理論的知見が見出される必要がある。

では、グローバルに広がり現地社会に適合しつつもルーツ社会に根差した文化とはいかなるものか、多文化に開かれつつも真正性を満たす文化とはいかにして可能なのか、この社会理論的な問いを食の世界を手掛かりに実証的な社会調査にもとづいて探ろうというのが本研究の目論見であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、グローバル化から生じている複雑なエスニック・ナショナルな状況を対象に、食という生活に密着した観点から、多文化化のなかでいかに社会的衝突を回避し共同性を創出していくことができるのか、という問題を考えるものである。

現代の文化は国境の内側で完結していない。人がますます移動するようになり、移民により文化がますます混淆する現代にあって、日本文化の流通はグローバルに活動する諸アクターによって担われるようになっていく。日本文化は世界各地で現地文化と交じり合い変容しているが、いっぽうで日本的と感じさせる「らしさ」を保っている。日本文化を、日本国という空間に閉じられたものや日本人という集団の占有物とみるのは神話にすぎない。しかしながら、文化本質主義を批判し、文化を絶えず構築され続けるものだと示す「だけ」では、この神話には対峙できず、私たちの日常生活にあふれる「エスニシティ」「ナショナルリティ」の消費を成り立たせる、より複雑な文脈もみえなくなってしまう。文化変容を検証するのに加え、日本から離れたところでお日本であることが維持されているのはなぜか、そこで日本的であるとはいかなる営みなのか問われなければならない。

ここで必要なのは、文化を統一された実体として考えるのではなく、絶えざるせめぎあい、異なる定義やイメージの操作、発話行為がぶつかりあう場として理解することだ。文化のなかには、多数の入り組んだ取り込みが存在している。そのようなプロセス自体を、多層的な意味を媒介しながら日々生産され消費される社会的な意味の場として解き明かさなければならない。それは何よりも、文化を地理と歴史、地域の人々のエスノグラフィックな生活戦略、グローバル資本や国際機関の交錯するアリーナとしてとらえることである(安井 2018a)。特定の文化実践や規範が「日本的」なものとして選択され、維持されている。しかし、この過程は一方的なものではない。ホスト社会の人々や移民たちは自分たち独自の日本文化に対する観点を形成し、同時に日本の企業や移住者たちも現地社会の好みに適応しながら日本文化を主張している。ある文化実践がいかにして現地化しつつもルーツを示す真正なものとされていくのか、その選択的過程を構成する複雑な諸実践が明らかにされなければならない。

そして食の文化ほど混濁的でありながらも純粋性を象徴するものはない。食は、異なるものを食す人びと(他者)を排斥し、同じものを食す人びとの間に共同性を喚起する。従来、日本食研究では、この食の共同性は国民共同体と等置して論じられてきた(池上ほか 2004)。だが、日本食の世界的拡大は多くの外国人により担われており、日本食の文化は「単一民族」のものではありえない。これからの食とエスニシティ・ナショナルリティの関係を問う研究は、多文化化・多民族化のなかで、共同 - 排斥、混淆 - 純粋の両義的な性質がどのように絡み合うかが分析されなければならないのである。

それゆえ本研究の目的は、日本人以外の人びとの展開する海外の日本食レストランに注目し、日本食の多民族化の過程を詳細に記述分析し、多文化に開放されつつもルーツ文化とつながった恒常性を成立させる条件を考察し、グローバル化の社会理論を更新することとなる。

### 3. 研究の方法

以上の目的を実現するために、本研究では、食文化を社会・文化理論的に分析するとともに、現地フィールドワークに基づく実証的な調査研究をおこなった。

第一の方法は、ナショナリズムと食の関係を問う先行研究の収集・精読であった。食に関連する英語圏の社会学・文化人類学雑誌(例、*"Food, Culture & Society"*, *"Gastronomica"*)に収録された論文のサーベイ調査を行い、食を調査するための理論的な分析枠組みを設定した。本研究では、非日本人の料理人や経営者たちによる「日本食」の再構築について、比較分析をおこなうことをもくろんだ。そのため第二に、海外発の日本食に関するエスノグラフィー、地誌、WEBドキュメント、映像記録を収集し、日本食受容の様相を伝える資料の収集・整理をおこなった。第三に日本人によるものでない日本食の現地調査を行い、日本由来の概念と現地の食材・調理法がいかに組み合わせられ、日本に関するさまざまなイメージやステレオタイプがいかに取捨選択されて新しい「日本食」が創出されているのかを明らかにしようと試みた。

在外日本食レストランは、コロナ禍によって、一時的な停滞はみられたものの、研究期間の前後を通じて増加し続けている(農林水産省によると、概数として、2006年2.4万店 2010年3.0万店 2013年5.5万店 2015年8.9万店 2017年11.8万店 2019年15.6万店 2021年15.9万店 2023年18.7万店)。日本食レストランの急速な普及を担っているのは、日本滞在経験を持たない多くの「外国人」たちである。その多くが中国や韓国出身である経営者は、彼らのもつ日本に関する知識・イメージに基づき日本食を展開しつつ、真正な日本文化・日本食を求めて日本文化を参照・継承している。こうした「日本食」「日本文化」を再定義する諸実践を明らかにしたいと考えた。

そのため、海外の日本食レストランにおいて日本料理の多文化化・多民族化を観察するとともに、関係者に対するインタビュー調査を行った。サンプリングした飲食店にてメニューや料理、店空間を観察するとともに、オーナーや料理人たちから聞き取りを行なった。同時に、飲食店の観察やインタビューとあわせて、総合的な民族誌的資料として立体化させるため、現地でも新聞記事、雑誌、官報などの印刷物、都市空間の観察記録、画像、映像記録を収集した。

これらのデータを元に日本食の多文化化・多民族化の過程をエスニシティやナショナリズムの社会学理論の観点から再構成していく。この結果を「日本食」のたどる複雑で錯綜した軌跡をマルチサイティッド・エスノグラフィーとして描きだす。そして日本食の変容・創造・再構成の分析を通じ、グローバル文化の脱ノ再埋め込みをめぐる社会理論の再検討を行った。

### 4. 研究成果

研究実績の概要と進捗状況について、年度ごとに述べる。

初年度である2019年度およびコロナ禍によりフィールド調査を実施することがほぼ不可能となった2020年度は、主として先行研究や関連する史資料のサーベイ調査と文献資料の収集を行った。サーベイ調査では、Nation, Nationalism と Food, Foodways に関する学術書・専門文献、*"Food, Culture & Society: An International Journal of Multidisciplinary Research"*(Routledge), *"Gastronomica: The Journal for Food Studies"*(University of California

Press)などの学術雑誌を対象に、食についての人文社会科学的な研究論文や文献を収集・整理した。同時に調査候補地域の日本食に関連する各種ドキュメント資料の収集を行った。特に海外の日本食・和食に関連する日本の官公庁（農林水産省、外務省、JETRO など）のアーカイブを探索し資料を整理した。ここでおこなった英語圏の食文化研究文献および和食や日本食についてのサーベイ調査で収集した資料を整理・分析した結果は、学術シンポジウムにおける報告（安井 2019a）や、個別の書評（安井 2019c）として発表された。またこれらの書評については、研究代表者の安井が主催してきた、食研究の読解を目的とした研究会である「食の研究会」において研究会メンバーたちがこれまで発表してきた複数の文献紹介原稿とともにまとめられ、内外の優れた食研究を紹介する文献レビュー集として刊行した（安井 2019b）。またこれまでのフィールドワークにおける記録を整理し読み直す作業をおこなった。多民族化・多文化化する社会において食文化を記述するための方法論の検討（安井 2020a, 2024）および必ずしも他者と共有できない味覚にもとづいていかにして食からエスニシティを論じることができるのかを考察した（安井 2020b）。

2020 年度同様に 2021 年度もコロナ禍による各種制限により、対面的な相互行為をともなうフィールド調査を実施することは難しかった。が、各種ドキュメント資料や現地メディアによる映像や写真およびヴィジュアル資料、SNSなどを介した WEB 媒体資料の収集に努めた。特に和食や日本食について広く国内・外国から収集してきた資料やデータを整理・分析し考察をおこなった。前年度に萌芽的に発表した食文化を記述するための分析枠組みを、ブラジルにおける日本・沖縄料理の現地化を考察に応用した論文を発表した（安井 2021a）。日本の食事に関するデータ分析を行ったもののなかでも、2015 年 SSM（社会階層と社会移動全国調査）のデータを多変量解析した論文では、日本国内に暮らす人びとの国産食品の消費購入頻度と選挙への投票行動や町内会参加などの社会活動と相関していることを明らかにすることができた。この論文は、社会学の学術誌『ソシオロジ』において査読論文として掲載された（安井 2021b）。

2022 年度には各種制限が緩和されたため、フィールド調査を再開することができた。かつ、当該年度は勤務校の制度として在外研究期間となったため、欧州に拠点を置き、各地の日本食・和食に焦点を当てた調査を実施できた。過年度に行ってきた理論研究にくわえて、フィールドで得られた実証データを合わせて検討することができた。これは、おもに文化研究の対象として食をとらえていた安井のそれまでの研究からさらに視野を広げ、世界商品・輸出戦略として展開される Japanese Food および Washoku、さらにはそれらを支えるグローバルなフードシステム、という政治・経済の領域を合わせて検討することで、単なる文化アイコンとしての日本食、エスニックな指標としての食文化の研究にとどまらない視野を獲得することに成功した。この結果として、食をもっぱら消費文化としてのみ論じてきた日本の食文化研究を批判的に検討し、食の生産段階、すなわち農の視点を接続することを指摘する論考を発表した（安井 2022b）。そして、過年度の理論研究で検討していた、人類学的存在論的転回を踏まえた知見をもとに、従来とは異なる現代社会の問題としての食文化研究における新しい地平を展望する論考も合わせて発表した（安井 2022a）。また在外研究の受け入れ先機関の研究者とともに日本食に関する共同研究をおこない、最新の食研究や日本食研究について検討し、海外の動向をまとめて紹介する国際共著の成果をあげることができた（安井・Park 2022）。

2023 年度は、年度の前半は補充調査として現地フィールドワークや資料収集を実施し、これまで収集してきた和食や日本食についての資料やデータをまとめて整理・分析する作業を続けた。年度後半では、収集・整理されたデータをもとに、分析・考察をくわえた結果について日本社会学会や日本村落研究学会で報告をおこなった。また、本研究の調査で明らかにしてきた、移民の食文化が社会に果たす役割について（安井 2023a）、移民のコミュニティへの食糧支援にみられるような「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」となる食の公共物としての側面について（安井 2023b）、発表することができた。

以上のような研究成果によって、本研究は多文化社会のなかで食文化が多民族に開かれてどのように具体化されるのかを理論的・実証的に検証した。本研究では、日本食の概念が特定のイメージ、ステレオタイプと結びついており、日本食の実践がそれを強化（または変容）させることを示し、そこに考えるべきエスニシティ・レイシズムの問題があることを提示することには成功したのではないかと考えている。あしかけ 5 年間におよびプロジェクトとして進められた一連の研究は、総体としてみるならば、これまで食文化とアイデンティティの関係を表すものとして示されてきた“*We are What We Eat.*”という理念を実証的に問い直す試みであったと言える。

この試みの背後には、ともしれば、「日本人の、日本人による、日本人のための」食として語られてしまっている日本語圏の食文化研究、和食をめぐる研究に対して、それらの研究群における文化ナショナリズムを相対化する意図が込められてきた。研究代表者の非力さゆえ、この研究が、ますます排外主義的傾向を強める日本社会にどれだけのインパクトを持つのか、それは必ずしも定かではないが、食文化とナショナル・アイデンティティの関係を再検討するという課題を、一国の言語圏・地域研究としてでなく、複数言語の史資料および海外現地調査の結果を踏まえ、多角的な観点から追及できたのは本研究の大きな意義である。特に近年は、Food Studies と呼ばれる、人文社会科学の諸分野が協働して食をめぐる問題に取り組む学際研究が世界的に盛んになっている。本研究は、この研究潮流を踏まえて、海外でも積極的に研究成果を発表してきており、世界的な食研究に日本の食の社会学・食文化研究を接続させる点で大きな貢献をなしてい

る。また、このように現実を裁断するのと異なる仕方で、グローバル文化をめぐる問題系についての議論基盤を提供する点で、本研究には社会学にとどまらず文化と社会をめぐる広範囲の研究を大きな貢献をなすものであったといえる。

<引用文献>

- Appiah, Kwame A., 2007, *Cosmopolitanism: Ethics in a World of Strangers*, New York: W. N. Norton. (=アッピア, クワメ・アンソニー(三谷尚澄訳)『コスモポリタニズム 「違いを越えた交流と対話」の倫理』みすず書房、2022年)
- Beck, Ulrich, 2006, *Cosmopolitan Vision*, Cambridge: Polity Press.
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press (=ギデンス, アンソニー(松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房、1993年)
- 池上甲一ほか, 2004, 『食の共同体』ナカニシヤ出版
- 安井大輔, 2018a, 「食嗜好と移民のアイデンティティ エスニシティ・グローバリティ・ローカリティの交錯」『嗜好品文化研究』(3): 57-69
- , 2018b, 「食文化の「型」 文化遺産としての「和食」 秋津元輝, 佐藤洋一郎, 竹之内裕文編著『農と食の新しい倫理』昭和堂, pp.145-170
- , 2019a, “Washoku as Contemporary Phenomena in Japan from Sociological Viewpoint”(現代日本における「Washoku」をめぐる諸現象 社会学的観点より)。(講演録)『立命館食科学研究』(2): 46-50
- , 2019b, 『フードスタディーズ・ガイドブック』ナカニシヤ出版
- , 2019c, 「食物語 食の履歴に反映される時代」『週刊読書人』(3296): 6
- , 2020a, 「食とエスニシティ」『食文化誌 vesta』(118): 44-49
- , 2020b, 「見える境界・見えない境界 食と身体感覚から見るエスニシティ」神本秀爾, 岡本圭史編『マルチグラフト 人類学的感性を移植する』
- , 2021a, 「食文化における集会的創造性 エスニックフードからローカルフードへ」松田素二編『集会的創造性 コンヴィヴィアルな人間学のために』世界思想社, 149-168
- , 2021b, 「食選択と社会に働きかける活動 国産食品とオーガニック食品の購入をめぐって」『ソシオロジ』65(3): 59-78
- , 2022a, 「モノ・場所・人から考える嗜好品研究のこれから」『嗜好品文化研究』(6): 126-136
- , 2022b, 「食を通じた異文化理解と多文化共生の課題と可能性」『季刊 農業と経済』88(4): 143-154
- ・ Sara Park, 2022, 「食科学研究・教育のかたちを探るための読書案内 フードスタディーズ・日本食研究の教科書・論文集紹介」『立命館食科学研究』(7): 297-308
- , 2023a, 「難民・移民とエスニック食文化」『ほんとうのグローバリゼーションってなに? 地球の未来への羅針盤』農村漁村文化協会, 84-87
- , 2023b, 「図書館と Food Justice 北米の都市図書館協議会による報告書」『カレントウェアネス-E』(458)
- , 2024, 「移民の食から社会を考える」湯澤規子, 伊丹一浩, 藤原辰史編著『入門 食と農の人文学』ミネルヴァ書房, 116-128

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 458
2. 論文標題 図書館とFood Justice：北米の都市図書館協議会による報告書	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 カレントウェアネス-E	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 安井大輔	4. 巻 88
2. 論文標題 食を通じた異文化理解と多文化共生の課題と可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊農業と経済	6. 最初と最後の頁 143～154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安井大輔, Park Sara	4. 巻 7
2. 論文標題 食科学研究・教育のかたちを探るための読書案内：フードスタディーズ・日本食研究の教科書・論文集紹介	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館食科学研究	6. 最初と最後の頁 297～308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00016766	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 安井 大輔	4. 巻 6
2. 論文標題 モノ・場所・人から考える嗜好品研究のこれから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 嗜好品文化研究	6. 最初と最後の頁 126～136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34365/shikohinbunka.2021.6_126	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 72
2. 論文標題 野入直美著 『沖繩奄美の境界変動と人の移動 実業家・重田辰弥の生活史』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学評論 Japanese Sociological Review	6. 最初と最後の頁 388 ~ 389
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4057/jsr.72.388	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 65
2. 論文標題 食選択と社会に働きかける活動 国産食品とオーガニック食品の購入をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 59 ~ 78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14959/soshioroji.65.3_59	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野沢慎司, 藤川賢, 安井大輔, 金成垣, 米澤旦	4. 巻 51
2. 論文標題 序論 多文化共生に向けた生活保障のシステム再編 日本と東アジア社会の取り組み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治学院大学社会学部附属研究所研究所年報	6. 最初と最後の頁 173 ~ 189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 谷垣和則, Albala Ken, Greg de Saint Maurice, 安井大輔, 鎌谷かおる, 南直人	4. 巻 2
2. 論文標題 シンポジウム「嗜好品としての「Washoku」」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館食科学研究	6. 最初と最後の頁 31 ~ 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00013925	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 500
2. 論文標題 思い出の味	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 白金通信	6. 最初と最後の頁 23～23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安井大輔	4. 巻 3296
2. 論文標題 食物語 食の履歴に反映される時代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 週間読書人	6. 最初と最後の頁 6～6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 文化遺産としての和食
3. 学会等名 ユネスコ創造都市ネットワーク食文化都市認定に向けて 食文化都市吹田を考えるシンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 藤原辰史, 安井大輔
2. 発表標題 激動する私たちの食を考える - フードテックと大学
3. 学会等名 2023年度 あるきはじめる大学 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Daisuke Yasui
2. 発表標題 Food Consumption and Social Activities : On the Purchase of Ethical Food
3. 学会等名 XX International Sociological Association World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 台所からみた近代の多様性 - 冷戦期のキッチンを紹介してみる生活空間の変容
3. 学会等名 第96回日本社会学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 持続可能な食農システムをめざすフィンランドの地域食政策と諸実践
3. 学会等名 日本村落研究学会東海・関西地区研究会・第50回関西若手ルーラル研究会 共同開催 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 オーガニック食品の選択と社会階層
3. 学会等名 第95回日本社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 安井大輔
2. 発表標題 食科学研究交流ネットワークの構築に向けて
3. 学会等名 Beyondコロナ時代の食と農（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Daisuke Yasui
2. 発表標題 Washoku as Contemporary Phenomena in Japan from Sociological Viewpoint (現代日本における「Washoku」をめぐる諸現象 - 社会学的観点より - )
3. 学会等名 Washoku as Luxury Items - 嗜好品としての「Washoku」 - (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 湯澤規子, 伊丹一浩, 藤原辰史	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 入門 食と農の人文学	

1. 著者名 池上甲一, 斎藤博嗣	4. 発行年 2023年
2. 出版社 農村漁村文化協会	5. 総ページ数 144
3. 書名 ほんとうのグローバリゼーションってなに? 地球の未来への羅針盤	

1. 著者名 松田素二	4. 発行年 2021年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 286
3. 書名 集合的創造性	

1. 著者名 野林厚志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 716
3. 書名 世界の食文化百科事典	

1. 著者名 松田素二, 阿部利洋, 井戸聡, 大野哲也, 野村明宏, 松浦雄介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山代印刷株式会社出版部	5. 総ページ数 366
3. 書名 日常実践の社会人間学 都市・抵抗・共同性	

1. 著者名 神本秀爾, 岡本圭史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 集広舎	5. 総ページ数 312
3. 書名 マルチグラフト：人類学的感性を移植する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究者学術情報データベース  
Ritsumeikan University Researcher Database  
<https://research-db.ritsumei.ac.jp/rithp/k03/resid/S001644>  
  
researchmap  
<https://researchmap.jp/read0155942>  
<https://researchmap.jp/read0155942?lang=en>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フィンランド	University of Helsinki		